

中世の瀬戸内の海に生きる人々の暮らし

— 佐伯区に伝わる「あまんじゃく伝説」の時代背景を探る —

県立広島大学 名誉教授 秋山 伸隆

はじめに

先ほど紹介いただいたように、私の専門は戦国時代の歴史である。昨年7月、あまんじゃく伝説について話をしてほしいと公民館の吉本さんから依頼があったが、「私には伝説は無理です」とお答えしたことを覚えている。でも、伝説の背景として「瀬戸内の海に生きる人々の暮らし」というようなお話なら準備できるのではないかとお話しした。それから10か月近く経つ。最初に吉本さんにお答えした内容とは逆になっている。この9か月の間、伝説のことばかり考えていた。周囲から、「先生は最近、あまんじゃくの話ばかりですね」と言われたりした。

今回の講演会だが、当初は1月30日、それが2月27日に延び、そして3月27日となった。こういうことをちゃんと記録しておかないといけないと思って、タイトルの上を書いておいた。2回の延期を繰り返して、本日、講演会が実施となった。私にとっては今年度最後の講演会である。そして昨日と打って変わってとても良い天気になった。来る途中、桜が咲いているのを見て、うれしくなった。

お手元に資料がNo. 1からNo. 6まである。まず、「はじめに」の所である。あまんじゃく伝説については、「区報さえき」にこのように紹介されている（「区報さえき」を掲げて）。これが「区報さえき」に載っている写真だ。依頼を受け、あまんじゃく伝説について調べてみなければならぬと思って広島市立中央図書館に行った。さまざまな文献を調べて図書館から帰る際に、ふと見たら広島市内の各区の区報が並べてあり、佐伯区の区報の冒頭に津久根島の写真が載っていたので、区報を一部取って帰った。

あまんじゃく伝説についていろいろ考えるようになって、「この伝説は一般の伝説とは少し違うのではないか」と思うようになった。資料に『広辞苑』の説明を引用しているが、伝説は「かたりごと」、つまり、口から耳に言い伝えられ、語り伝えられるものである。民俗学ではそれぞれ区別する定義の仕方もあるようだが、一般的には文字によって記録されたものではなく、言い伝えられてきたものだろうと思う。ただ、あまんじゃく伝説は、江戸時代の初めごろからさまざまな文献に記録されている。かつて、「まんが日本昔ばなし」というアニメがあった。「むかしむかしあるところに・・・」、そういう語り出しで、具体的な人名や地名などは、はっきりとは明示されないケースが多いように思う。

ところが、佐伯区に伝わるあまんじゃく伝説には、湯蓋道空とか道裕といった人の名前、海老山、津久根島といった実際の地名が示されている。江戸時代に再建されたものだが、道空の墓といわれるものが今でも津久根島に残っている。湯蓋家のご子孫という方もいらっしゃる。岡山市に桃太郎の子孫と称する方がいるという話はあまり聞かないので、これはとても不思議な話だと思うようになった。

そこで本日はまず、江戸時代のさまざまな地誌類に記されたあまんじゃく伝説の内容が、時期に

よってどのように変わっていくのかを確認しながら、このような伝説が生まれた時代背景を中世の瀬戸内の海に生きる人々の暮らしとの関係において考えようと思う。

もう一つ、準備をしながら気になったのは、あまんじゃく伝説を読んでいて何か違和感のようなものを感じたことである。この話には二つの山があって、一つは道空の話、厳島神社を信仰して大金持ちになり、そのお金は厳島神社の客人社の造営のために使ったという、いわゆる長者伝説である。もう一つは、息子の道裕ときたら父の言うことに逆らってばかりいたという、あまんじゃく伝説である。言ってみれば、一つの話の中に二つの山がある。普通、伝説というのはいったい一つの山で終わるといふ単純な構成を取っているが、このあまんじゃく伝説では、なぜか二つの山があるということである。

今から2、3週間前、この二つの山は、元々は別々の伝説だったのではないかと、二つの伝説が合体して今のような形になったのではないかと思うようになった。そういう見方が成り立つのかどうかについてもお話ししてみたいと思う。

1 近世の地誌類に見える「湯蓋道空」

では、「1 近世の地誌類に見える「湯蓋道空」」について話をしたい。

広島藩では江戸時代の初め、寛文3年(1663)の『芸備国郡志』を皮切りとして、さまざまな地誌類が江戸時代を通じて編纂されている。広島藩における地誌類については、平凡社の『広島県の地名』という地名辞典の巻末に「地誌類の系譜」ということで簡単に紹介されている。

これから地誌類に収録された湯蓋道空に関する伝説の内容を、古い方から年代順に紹介する。No. 1の右側に地誌類の記述を引用している。普通は資料の原文の通りレジュメに載せるのだが、読みやすさを考慮して、文章の区切りの句点「。」を補った。また、送り仮名がないところは必要に応じて送り仮名を補った。ひらがなには濁点を付けた。江戸時代以前は濁点を使わないが、読みにくいので濁点を補った。カタカナで記される「ハ」「ニ」「ヲ」の助詞も読みやすさを考慮してひらがなに直している。また、原文にはルビがふっていることがあるが、わたしの技術では行間が空いてしまい、間延びした印象になるので、原文に付けられているルビについてはく>カッコ内に補った。私が付けたルビは()カッコ内に補っていく。念のため、依拠した資料の原文についてはNo. 5に活字資料だが原文を載せている。今日は原文を見てもらわなくても、資料の【1】から引用している文章(太字で引用している)を見ながら聞いてもらえたらと思う。

最初に説明するのは、資料の【1】、『芸備国郡志』である。『宮島町史』から引用した。『芸備国郡志』は広島藩において最初に編纂された地誌で、原文は漢文体で記されている。黒川道裕という学者が藩の命令によって江戸において編纂したものだそう。その中に「陵墓門」、お墓についての記述があって、「津久根島の石碑」という項があり、湯蓋道空について説明している。

『芸備国郡志』の記述を見ると、佐西(ささい)郡の海浜に温泉が湧き出て、ここを湯蓋と呼んだとある。その近くには道空という豪農、富裕な農民が住んでいたとしている。道空は、厳島神社の「客人の宮」、廻廊入口からすぐの客(まろうど)神社のことだが、この神社が荒廃し、雨漏りまでしている状態だったので、自分の資財をすべて寄付して屋根を葺き替えたとある。宮島の人々がこれに感謝して津久根島に「石碑」を建て、道空を祭った。道空が亡くなった後、温泉は枯渇したと記されている。

「石碑」というと、私たちは何かを記念して建てた石碑を思い浮かべるが、「石碑」という言葉の意味は石で作った塔だから、墓石も石碑と呼ぶようだ。ここで、『芸備国郡志』が「石碑」と呼んでいる物は何なのか。墓なのか、墓ではないのかについては、この記述だけでは判断しにくいところがある。ただ注意しなければならないのは、墓を建てたのは息子ではなくて「宮島の人」だと『芸備国郡志』には書いてあるということである。また、ここで確認したいのは、道空は貧しい漁民、魚業を営んでいたと言われるが、『芸備国郡志』では、「豪農」＝富裕な農民と説明されていることである。石碑は宮島の人建てたとき、息子の道裕が建てた墓とはされていない。つまり、『芸備国郡志』には道空の話は出てくるが、息子の道裕があまんじゃくと呼ばれて親の言うことを聞かなかったという話は、まったく出てこないということである。

次は【2】の『巖島道芝記』である。元禄15年(1702)に成立した。「道芝」というのは道端に生えている芝、草ということだが、ここでは道案内、巖島の道案内記という意味で、『巖島道芝記』というタイトルが付けられている。この『巖島道芝記』の中に塩屋大明神(塩屋神社)のことが出てくる。記事を引用しているが、難しい言葉が時々出てくる。「造次顛沛」(ぞうじてんぱい)、私はこの言葉を知らなかったのだが、「造次」とは忙しいとき、「顛沛」とは躓いて倒れるとき、つまり、ほんのわずかの時間でも、という意味だそうである。「蓬莱山」とは、中国の仮想上の山で、東の海の中にあって、仙人が住んでいて不老不死の地と言われている、秦の始皇帝が不老不死の薬を採ってこいと命じたという、あの蓬莱山である。宮島には蓬莱岩と呼ばれる岩が聖崎(ひじりさき)にある。宮島の北端である。

では、『道芝記』にはどんなことが書いてあるか。湯蓋道空と巖島神社との関係について説明している。塩屋大明神の相殿(あいどの)、相殿というのは同じ社殿に二柱以上の神様を合わせ祀ることだが、湯蓋道空夫婦が神様として祀られている。

海老山の麓に住む夫婦は貧しく、魚業を営んでいた。常日頃から巖島大明神を崇敬し、毎日、神前に魚を捧げていた。その思いが通じたのか、あるとき舟で巖島の沖(蓬莱岩の辺りだろう)を航行していたら海面に金の砂が浮かんでいた。驚いて金の砂を舟に汲み入れて、これによって巨万の富を手に入れることができた。ただ、道空はその富をすべて客人社(まろうどしゃ)の修造のために使ったと説明されている。

『道芝記』では、道空は貧しい漁民であったが、日頃から巖島神社を崇敬し、その思いが神様に通じて神の恩寵を得て、巨万の富を手に入れることができた。しかし、その富は自分のために使ったのではなく、巖島神社の修造のために使ったという、いわゆる長者伝説の内容になっている。

ところが、『芸備国郡志』にあった津久根島の話はまったく出てこない。つまり、『道芝記』はあまんじゃく伝説にはまったく触れていないということになる。

その次の【3】「国郡志御用ニ付下調書き出帳」は、五日市村から出された書き出帳の控えである。『五日市町誌』に引用されている。「人名」という項目で、かつてその村に住んでいた有名な人物について報告するようという指示が出ていて、五日市村からは湯蓋道空について報告した。「国郡志御用ニ付下調書き出帳」は、広島藩が次に紹介する『芸藩通志』を編纂するために領内すべての村から差し出させたもので、ひな形が示されている。「〇〇の項目について報告せよ」という指示が出て、村々がその指示に従って同じ様式で下調書き出帳を提出した。藩に提出されたものは残っていないが、提出する際には必ず控えを作っており、その控えがかなり残っている。五日市

村の控えは残っているが、海老塩浜のものは残念ながら残っていない。

五日市村から出された書出し帳を見ると、道空については『厳島道芝記』に書いている内容をそのまま記載している。村に伝わった言い伝えの内容を書いたのではなくて、『厳島道芝記』にそのことについて詳しく書いている、という報告の仕方をしている。ただし、「下調書き出帳」では道空の墓が津久根島にあることを明記している。また、その墓石が海中に沈んでしまったために、井口村の漁民が墓、石塔を再興したことも記されている。

次は【4】の『芸藩通志』である。幕末近くに編纂された広島藩の地誌である。佐伯郡に関する記述は巻（まき）49～55にある。厳島は別項となっている。巻55の「墳墓」、お墓に関する記事の中に「湯蓋道空の墓」という記事がある。当然のことだが、『芸藩通志』は『国郡志御用ニ付下調書き出帳』を基礎資料としているから、書出し帳に書かれている内容と基本的には同じである。ただ、ここで注目したいのは墓石が海中に崩れ落ちてしまった後で、この辺りで魚がとれなくなったことが書かれている。困った漁民たちが墓を修復したと書いている。つまり、津久根島の道空の墓とこの地域における漁業との関係について、『芸藩通志』がはっきりと言及していることが注目されると思う。

道空と厳島神社・塩屋神社との関係については『厳島道芝記』の記述を踏襲しているが、『芸藩通志』独自の内容としては、道空は「五日市塩田（海老塩浜）の開発の人」であるという言い伝えもあるという情報が注目される。

次は【5】の『厳島図会』である。これも『宮島町史』からの引用である。

「^{つくねがしま} 抓島 ^{ひろしま} 厳島より ^{ちゅうと} 広島へ ^{めぐり} 渡海の中途にあり。周囲三町」という書き出しで始まる。先日、宮島口の栈橋でフェリーを待っている時に、何気なく東の海上に目を向けると津久根島が見えた。宮島から高速艇で宇品に行く時も津久根島を見ることが出来る。

「^{ぞくでん} 俗伝に云、^{さんによじんをつくね} 三女神^{しま} 芋抓^{しまのうへ} を投じた^ゆ まひける^{ぶた} が島^{はか} となれるなりと。島^{しま} 上^{うへ} に湯蓋^ゆ 道空^{ぶた} の墓^{だうくう} あり。道空^{はか} は佐伯郡^{さへき} 五日市^{ごひつち} 海老山^{かいろうさん} の^{ふもと} 桎^{ふうふ} に夫婦^{みまづ} すみて、その身^{すなどり} 貧しく^{わざ} 漁^{いづく} を業^{しまたいみやうじん} となしけるに、^{しんかう} 厳島大明神^{いんじま} を信仰し」とあり、この辺りは『道芝記』の記述と基本的に同じである。

資料の【5】の挿絵を見てほしい。「湯蓋道空の故事」とあって、下の方に船がある。向こうに見えるのが宮島の蓬莱岩の辺りをイメージしているものと思う。道空が立ち上がって、柄杓のようなもので海面に浮かんでいる金をすくって船に汲み入れている。それを見ているのが妻の道昌と思う。金が海面に浮かんでいる、太陽の光がキラキラと海面に反射しているイメージだが、この場合は実際に金が浮かんでいたということである。ちなみに宮島観光協会のイベントで、「ぐるっと宮島再発見」という、小さな船で宮島を一周するツアーが年4回ある。有料だが、今年の春は4月29日と5月29日、秋にも2回ある。これに参加していただくと、蓬莱岩がどういう所か、見てもらうことができる。もし皆様の信心が厳島大明神に通じたら、ひょっとしたら金の砂が浮かんでいるかもしれない。

以上、5種類の地誌類を見てきた。年代順に並べてみると、最初の『芸備国郡志』では豪農、富裕な農民とされていた道空が、『厳島道芝記』以降は貧しい漁民という説明の仕方になっている。厳島大明神を崇敬したことによって恩寵を得ることができて豊かになり、その財貨は厳島神社の客人社を修造するために使われたという説明になっている。

津久根島については、『芸備国郡志』では宮島の人が建てた石碑とされていたが、【3】の「書出し帳」からは道空の墓とされるようになる。ただし、誰が建てた墓なのかは地誌類では全く記載されていない。息子の道裕の話は出てこない。そして、墓石が海の中に崩れ落ちた後、魚が捕れなくなったので、困った井口村の漁民が墓を再興したという記事が記載されるようになる。つまり、漁業、漁民との関係が強調されるようになるという変化を読み取ることができる。

一方で、これまでの説明でわかるとおり、道空の息子道裕はまったく登場しない。つまり、「あまんじゃく伝説」は、今紹介した近世の5点の地誌の中では、全く出てこないというのがわかる。

では、今、私たちがあまんじゃく伝説と呼んでいる話がいつから登場するのか、「2「あまんじゃく」伝説の登場」というところに移りたい。

2 「あまんじゃく」伝説の登場

「あまんじゃく」伝説が江戸時代の文献に初めて登場するのは、資料の【6】の香川南浜（かがわ なんぴん）という学者が書いた『秋長夜話』（あきのながよばなし）という書物である。『秋長夜話』の「秋」は、春夏秋冬の「秋」と安芸国の「安芸」に掛けている。安芸国のさまざまな地名、人名あるいは伝説について、南浜が自分の解釈を記したものである。南浜は18世紀の人で、1734年に生まれ1792年に亡くなっている。広島の本屋さんの家に生まれ、本屋だから本に囲まれて育ったわけで、幼い頃から学問を好み、日本や中国のたくさんの本を読み、後に京都で儒学の勉強をして、抜擢されて広島藩の学問所の儒官、今でいえば学校の先生になった。

南浜は、日本の儒学者の中でも、後代の注釈によらないで孔子・孟子の教えを記した原典を研究して、孔子や孟子が何を伝えようとしたのか、その真意を研究しようとする「古学派」と呼ばれる学派の流れに属しているそうである。私は儒学のことはよくわからないが、例えば朱子学というのは、朱子という孔子・孟子から何世紀も経った後の学者が解釈、注釈をしたものを研究するのが朱子学である。陽明学というの、王陽明という後の時代の人々が解釈したものをテキストにして研究する。これに対して古学派は、孔子や孟子が生きていた時代に彼らが話したことを記したとされる原典を研究して、孔子や孟子の教えはどういうものかを突き詰めて考えていこうというものである。ある意味では、近代的な学問と同じような、実証主義的な研究をしようとする人たちである。

ネットで調べていたら、香川南浜の石碑が広島駅の新幹線口の明星院というお寺にあるということを知った。大学に出かけるときに、ちょっと寄ってみようかと思っている。

この『秋長夜話』は、『広島県史 近世資料編VI』に載っている。その解題を見ると、できたのは天明初年（1781）頃とされている。広島城下、厳島、安芸国の南部の方言・風俗習慣・信仰・行事、地名や史蹟、歴史上の人物などについて、非常に豊かな知識を基として、原典を引用して検証し、自分なりの解釈を述べる、という内容になっている。今、私たちが広島弁と考えている言葉が元々どういう言葉だったのかについて触れているところもある。

「あまんじゃく」伝説に関する部分は、次に引用したとおりである。中国の古典の引用部分は、漢文体になっているが、読み下し文に直した。発言や引用箇所には「」や『』を付けて、ここは誰が言った部分か、わかりやすい形にしている（間違っている部分もあるかもしれない）。

「搏（ツクネ）島に墓あり。伝へいふ」、言い伝えによると、という書き出しで始まる。「昔五日市わたりに人あり。常に父の言に違ふ」、湯蓋道空、道裕という人名は出していない。おそらく南浜

から見ると、湯蓋道空という人物は、実在の人物とは到底思えないので、固有名詞は出さないでおこうと判断したのだと思う。あくまでも伝説ということで書いている。内容は、今、私たちがあまんじゃく伝説と呼んでいるものとまったく同じである。父が死に臨んで「地方（じかた）の山に葬らん事を欲す」、本当は陸地の山に葬ってほしいと望んでいたが、その子に遺言して、「私が死んだら必ず津久根島にお墓を造ってくれ」と言い残した。父が亡くなった時、その子は泣いて次のように言った。「私はこれまでずっと父の言い付けに背いてばかりきた。臨終に父が遺言として言い残したことに背くわけにはいかない」として、津久根島に葬ったと書いている。

その後で、南浜は中国の古典を引用している。「酉陽雜俎」、「ゆうようざつそ」と読むらしい。中国の唐の時代のさまざまな珍しいできごとなどを書き記した書物のようである。どういう内容かというと、「昆明池の中に塚、お墓がある。この墓のことを「渾子」（こんし）と呼んでいる。なぜかという、昔この辺りに住んでいた人が子どもに渾子という名を付けた。しかし、子どもは常に父の言うことに従わないで逆らってばかりいた。父が東と言えば西、水と言えば火、いわゆるあまんじゃくである。父は病気となって、いよいよ臨終のときを迎えた。心の中では少し小高いところに葬ってほしいと思ったが、何しろ息子は自分の言うことに逆らってばかりいたから、わざと偽って「死んだら水の中に葬ってくれ」と言った。父が亡くなると渾子は泣きながら「私は、今日、父の命に背くわけにはいかない」と言って、池の中に父を葬ってお墓を造ったと、「酉陽雜俎」という書物に書かれている。

もう一つ、盛弘之（「せいこうし」と読むのだろうと思う）の「荊州記」（けいしゅうき）という書物がある。これはネットで調べてもどういう書物か、よくわからなかったのだが、「酉陽雜俎」よりだいぶ前で、中国の南北朝時代の宋、5世紀ごろのことである。荊州、現在の湖北省、揚子江の中流域辺りの地理、歴史について書いた書物のようである。「佷子」、これも「こんし」と読む。「佷子の家は非常に豊かである。しかし、佷子は幼いころから大人になるまで父の言うことに常に従わなかった。父は臨終となって、心の中では山の上に葬ってほしいと思ったが、子どもは自分の言うことに従わないだろうと思って次のように言った。『私を水際の石の上に葬ってくれ』と。佷子は父が亡くなって次のように言った。『私はいつも父の教えを聞かなかった。今、まさに父の言うことに従わなければならない』。そう言って、家の財産をすべて費やして、石の墓を造って、その周りに土をめぐらして堤のようにして水に囲まれた中之島のような所を造った」、このように書かれている。

二つとも同じような内容だが、ここに書いてあることは、今、私たちがあまんじゃく伝説と呼んでいる内容そのものである。南浜は中国の古い書物に書かれている内容が日本に伝わって来て、このような伝説が生まれたのではないかと疑いを持っているようである。ただし、「異域同譚」（いきどうたん）、異なる国で同じような話が生まれる可能性もないことはない、中国は中国でこのような伝説が生まれ、日本では日本でこういう伝説が生まれたかもしれないとも考えている。

人間が考える教訓話というものは、古今東西、同じような話が出てきても全然不思議ではない。必ずしも中国の古典の受容ではないと、南浜は考えているのだろうと思う。

ここで確認すべきことは、「あまんじゃく伝説」が、南浜が『秋長夜話』を書いた天明初年（1781）頃、広島城下の知識人である南浜の耳に入るほど、安芸の地域に流布していたことは間違いないということである。その一方で、江戸時代のこれより前に編纂された地誌類が、まるで申し合せたよ

うに「あまんじゃく伝説」に一言も触れていない。【1】から【5】の中にあまんじゃく伝説が一切出てこないのはなぜだろうか。

私が思うに、「道空・長者伝説」と「あまんじゃく伝説」は、元々は別々の話だったのではないだろうか。地誌類の编者たちが注目したのは、巖島神社とのかかわりにおいて、道空が長者になったという「道空・長者伝説」の方だった。そういう話の方が彼らの目を引いたのである。しかし、その後、「あまんじゃく」とは湯蓋道空の息子の道裕であるという筋書きを考え出した人がいて、「道空・長者伝説」と「あまんじゃく伝説」とが合体して、今のような話になったのではないかと考えている。

(休 憩)

それでは、No. 3の右側、上の方の「湯蓋道空は実在の人物か」というところから再開する。今回、この講座を準備するためには少々苦勞した。普段、話をしている毛利氏のこと、あるいは宮島のことであれば、どこにどういう資料があるということは、すべてと言え大げさであるが、およそわかっているつもりである。しかし、湯蓋道空には本当に困った。日ごろ、学生にネットでの検索はあまり信用するなど言っておきながら、この時ばかりは湯蓋道空という単語をネットで検索してみた。有難いことに全く知らない文献をすぐさま教えてくれた。

「レファレンス協同データベース」というものがある。今回、私はその存在を初めて知った。レファレンスというのは、図書館でさまざまなことを質問すると、職員の方がいろいろ調べてくれて、「こういう本を見ると出ていますよ」と教えてくれるサービスである。昔は「参考調査」という言い方をしていたが、日本全国の図書館には利用者から実にさまざまな問い合わせがある。問い合わせを受けると、図書館の司書の方々が調べて回答する。その内容を記録しておいて、それを国立国会図書館が集約してデータベースとしてネット上で公開している。

だから例えば、「湯蓋道空」という単語と「系図」という単語を合わせて入力すると、「レファレンス協同データベース」に行き当たる。2015年、広島県立図書館に「広島市五日市の民話「あまんじゃく」に出てくる湯蓋道空の一族の家系図が載っているものが見たい」という問い合わせがあった。その問い合わせに対して、県立図書館が3冊の図書を紹介している。うち2冊は、これからお話しする都築要（つづきかなめ）氏の『新広島城下町』と『佐方の昔話と思い出の散歩道』（佐方地区町内会連絡協議会他、2001年）である。『佐方の昔話と思い出の散歩道』は、背表紙にタイトルの文字を入れるのが難しいような薄い本である。地区で出版されたこういう本も、県立図書館はちゃんと所蔵しているのだなと感心した。もう1冊は及川儀右衛門氏の『芸備今昔話』、これには家系図は載っていないが参考になるということで紹介されていた。

私も、はつかいち市民図書館と広島市立中央図書館で読んでみた。確かに湯蓋家の系図というものが載っていた。No. 6の【7】と【8】を見てほしい。湯蓋家の系図が紹介されている。草津に湯蓋家の子孫の方がお住まいである。それと佐方に長さんという家がある。それぞれ湯蓋家の系図が残っており、内容を見ると、どちらも同じ内容のようである。

まず、【7】である。「道空傳曰新中納言知盛後也」、道空は平清盛の4男の知盛の子孫であると説明されている。草津の湯蓋家に伝わっているものも同じ内容である。ただ、これはにわかには信じ難い。また、「旧記云」以下の内容は、基本的に『巖島道芝記』の内容と同じである。道空が巖島神社の客神社を再興した年代について、具体的に後花園天皇の時代、永享2年（1430）と記述してい

るところが、他の地誌類とは異なるところである。

【7】の写真は活字に直していないので読みにくいと思うが、真ん中からちょっと後半にかかる辺りに傍線を付けている。ここに、「後花園帝御宇永享二年巖島客人の社壇再興候」という文章が出てくる。私はこれを見た時に「永享か」と、ちょっと驚いた。湯蓋道空は実在の人物とは思えなかったのだが、この部分が非常に気になった。なぜかという、No. 6の資料の【9】をご覧いただきたい。大願寺文書317号「巖島客人社棟札写」である。これを見ると、立柱が永享元年（1429）、上棟が永享4年（1432）、遷宮が永享5年（1433）と書いてある。

また、資料の【10】、巖島野坂文書1813号である。大内氏の奉行人が安芸国と周防国の境の小瀬川（木野川）の河関を管理していたと思われる城勘解由左衛門尉に対して、巖島神社神主の藤原親藤から、「山代庄宇佐山材木の河関の事、勘過」という依頼があったことを伝えている。巖島神社の造営のために周防国の山代庄宇佐山、岩国から錦川沿いに遡っていくと、宇佐八幡宮という神社がある。寂地峡の近くだが、宇佐八幡宮の境内には山口県の天然記念物に指定されているスギ（杉）巨樹群がある。そのあたりから巖島神社造営のための材木を切り出して、川に流して宮島まで運ぼうとしている。川には関所があって、流される材木は止められて通行料を払わないといけないことになっていた。大内氏が「それを免除してやれ。巖島神社造営のためだから通行料は取るな」と命じているのが資料の【10】である。こちらが永享8年（1436）だから、【7】の資料に出てくる永享2年（1430）というのは、まったくでたらめだとは思えない。

しかし、資料の【9】、客人社棟札、これはよくよく見てみるとちょっと怪しい。なぜかという、例えば、最初に柱を立てる立柱が永享元年8月16日となっている。しかし、「永享」という元号に改元されたのは正長2年9月5日である。「永享」に改元されたのは9月5日だから、永享元年8月16日という日付は存在しないはずである。ちなみに、改元された年に出された感状は偽文書を見つけやすい。例えば、巖島合戦は天文24年（1555）10月1日に起ったが、10月23日に改元されて弘治元年になった。つまり巖島合戦の日は天文24年で、まだ弘治元年になっていないのに、「弘治元年」と書かれた感状が残っている。これは明らかに偽文書である。

「棟札」は棟上げのとき書くものだから、柱が建てられた日付を遡って行って、この日は正長2年だが、改元されて永享元年になったのだから、永享元年にしておこうと考えたと言えなくもない。ただ、この棟札写は、巖島神社の棟札としては一番古い。この後、棟札が現れるのは戦国時代になってからなので、これはちょっと時代が早すぎてあやしいと思う。棟札というのは、建立を主導した人の名前が書かれるから、本来であれば巖島神社神主、あるいは神仏習合の時代であるから座主などの名前が入るはずなのに、そういう名前が全く入っていない。そして大工の名前の書き方もやや怪しいところがある。

さらに調べていくうちに、また困った資料を見つけてしまった。それが資料の【13】である。これは巖島神社の昭和の大修理を行った際に、参考とすべき資料を集めたものが報告書に収めてある。『宮島町史』にも収録されているので、そこから引用した。野坂新之丞という巖島神社に所属する大工の家に残っていた旧記が紹介されている。それを見ると、（中略）のすぐ後だが、「後花園帝御宇客人宮永享二年湯蓋道空入道寄進ニテ再建立」とある。湯蓋道空が費用を寄進して客人宮が再建されたと書いてある。「これは困ったな」と思った。

「野坂新之丞所蔵旧記」は、もっともっと長いもので、戦国時代の大鳥居に関して書いてある部

分もある。私はその部分を講演の史料として引用したことがある。湯蓋道空の客人社再建寄進の部分を「信用できない」とすると、大鳥居に関する部分も疑われないといけなくなるわけで、正直「困ったな」と思ったが、客人宮の部分はやはりおかしい。湯蓋道空の名前が最後から4行目にもう1回出てくるが、その前に「本願職大願寺」という言葉が出てくる。大願寺が厳島神社の修理造営を担当するようになるのは戦国時代からで、永享年間に大願寺が造営に参加した可能性はゼロである。

つまり、ここに書かれていることは、すべてが古文書等として野坂新之丞の家に伝わってきたのではなく、部分的には江戸時代のどこかで書かれたものが含まれていると考えられる。つまり客人社の造営に関する内容は、『厳島道芝記』の記述などを参考にして、野坂新之丞の先祖が書き加えた可能性がある、オリジナルの資料ではないとは思っている。したがって、湯蓋道空という人物が実在したという可能性は、限りなくゼロに近いだろうと思う。

ただし、湯蓋家の系図を見ると、江戸時代以降については、実在の人物だと思う。資料の【8】でいうと、江戸時代の知直から後は実在の人物だろう。庄屋を務めたとか、海老塩浜の開発に力を尽くしたことも、『芸藩通志』の記述と符号する。

津久根島の道空の墓については、及川儀右衛門氏『芸備今昔話』に記述がある。及川儀右衛門氏についてはNo. 3の下の方にデジタル版「日本人名大辞典」の説明を引用した。大正・昭和の時代に活躍された歴史学者で、広島高等師範学校を卒業され、後に広島高師の教授となり、戦後は故郷に帰られて盛岡短期大学（現在の岩手県立大学盛岡短期大学部）の教授を務められたそうである。著作の『毛利元就』は元就の伝記としてよくできたものである。「大溪」という号で『広島の心学』という書物も書かれている。その他に福岡県、広島県、東北地方の民話に関する著作もある。

広島と東北はともかく、福岡とはどういう関係なのかと思ったら、福岡県久留米市に福岡県立明善高等学校がある。旧制の県立久留米中学の流れを引く高校である。おそらく及川氏は広島高等師範卒業後、しばらく明善高等学校の前身校に勤めていて、久留米辺りの民話を集めて著作を書かれたようだ。

『芸備今昔話』には昭和6年（1931）の『五日市町誌』が引用されている。終わりの方の傍線部だが、津久根島に湯蓋道空の墓がある、南面した碑の正面には「湯蓋道空墓」、右側には「天保十三年次壬寅秋日再興」、左側には「湯蓋源蔵、毛保長蔵、安部彦助、一類中」と刻まれている、島の東側には石灯籠があつて、「五日市町 湯蓋清助」と刻まれていると説明されている。

【12】に都築要氏『新広島城下町』の写真を引用している。中央にお墓があつて、右側に灯籠がある。こ元々は島の東側にあつた灯籠を、山の上のお墓の近くに移されたのではないかと思う。湯蓋清助というのは、【8】の家系譜でいうと、⑱の所に名前が出てくる。

天保13年（1842）という年号が刻まれているので、資料の【3】の「国郡志御用ニ付下調書き出帳」に記されている、井口村の漁民が再興した石碑が再び海に崩れ落ちてしまって、天保13年に再々興した墓が現在も残っているのだと思う。YouTubeを見ると、津久根島に上陸した時の様子を撮影したものがいくつかある。松の林をかき分けて山の上まで登り、この墓を撮影されている。また台風などで墓が倒れたらしいが、『新広島城下町』に掲載されている写真の墓が現在もあるようである。

3 海に生きる人々の暮らし

最後の「3 海に生きる人々の暮らし」、No. 4である。本来であれば、この部分を中心に話をする予定だったが、あまりにも伝説の話がおもしろ過ぎて、肝心のこの部分の準備が十分にできないまま今日を迎えてしまって申し訳ない。

古代においては、海を生活の場とする人々を「海人」（あま）と呼び、彼らが暮らす地域は「海部（あま）郡」、「海部郷」という地名が付けられた。安芸国では佐伯郡に「海（あま）郷」、安芸郡にも字は違うが「安満（あま）郷」と呼ばれる所があった。古代の佐伯郡の「海郷」は現在の江田島市の能美島、安芸郡の「安満郷」は広島市の安芸区辺りから呉市沿岸部を経て倉橋島（呉市）・江田島（江田島市）に及ぶ広い範囲がそう呼ばれていたようである。広島湾の島しょ部と重なっている。

古代の海人の主な生業は、漁業、製塩業、船を使った運輸業である。『延喜式』という古代の書物を見ると、安芸国が中央に貢納する中男作物（ちゅうなんさくもつ）、17歳から20歳の男子のことを「中男」と呼ぶが、安芸国で彼らが納めなければならない税の中に「比志古鰯」（ひしこいわし）という言葉が出てくる。これは、カタクチイワシのことである。もちろん生で都まで運ぶことはできないので、イリコのような状態に加工して調味料として使われる。こ広島湾で獲れたカタクチイワシが税として納められていたということである。

同じく『延喜式』によると、安芸国から納められる調・庸の中には塩が含まれていた。古代から中世までの塩づくりは、最初は「藻塩を焼く」といって、海水に浸した海藻を採り出して水分を蒸発させて、その上から海水をかけてやると濃い塩水ができる。そうやって作られた、普通の海水より塩分の濃度が濃くなった塩水を薪で煮沸して、水分を蒸発させて塩を採るというやり方である。

中世になると、江戸時代の入浜式塩田のようなやり方が始まっている。人工の砂浜ではなくて、自然にできた遠浅の砂浜で、潮が引いた後、表面の砂をかき集めて、塩分が付着した砂の上から海水をかけ、それを繰り返すことで濃い塩水を得て、煮沸して水分を蒸発させて塩を採る。広島湾の沿岸・島しょ部は安芸国の塩の生産地帯であった。

こういう塩づくりの方法では大量の燃料、薪が必要になる。島しょ部の場合、島内の山は限られているから、伐りすぎると禿山になってしまう。そこで、本土側から、現在の五日市、廿日市辺り、さらには山間部から伐り出した薪を島の塩浜まで運んで、それで塩水を煮沸する。

島しょ部の塩浜に薪を運ぶ船を「薪船（たきぎぶね）」と呼んでいた。資料の【14】(No. 4)を見てほしい。鎌倉時代の史料だが、中権守（なかごんのかみ）は衣多島（江田島）の荘官（役人）である。彼の書状の中（傍線部）に「薪船」という言葉が出てくる。これは江田島で塩づくりのために必要な燃料を、廿日市、宮内の辺りの山から伐り出して船で運んでいた。それが「薪船」だと思う。

一方、「塩船」という言葉も出てくる。資料の【15】、戦国時代の厳島神社の神官・棚守房頭が書いた「房頭覚書」を見ると、時期は厳島合戦の直前だが、陶方の軍船が佐東（太田川河口）へ入る塩船を二、三艘海上で拿捕して、振り返りに宮島に押し寄せてきたと書いている。

「塩船」と「薪船」は実は同じ船のことで、廿日市、五日市辺りから薪を積んで江田島や能美島へ運んでいく。帰りには江田島や能美島の塩浜で生産された塩を積んで廿日市に運んでくる。つまり、往復する時の積み荷が違うだけで、同じ船が「薪船」「塩船」と呼ばれていたのである。

江戸時代の廿日市の町には「塩之座町」という町名があった。【16】の絵図を見てほしい。文字

が横向きになっているので読みにくいですが、左側の方、道路があって町の名前が書いてある。「塩之座町」、右側は「東町」である。「東町」には本陣があって、その隣が現在は廿日市市の中央市民センターの敷地になっている。上の方に矢印をつけて「天満宮」と書き込んだが、その下に「鳥居」と書いてある。つまり、天満宮がここである。中央市民センターの左側（西）に進むと「塩之座町」、さらに進んでいくと、四つ角があって、黒い●を付けている。ここが広島市信用組合廿日市支店である。ここからまっすぐ北の方へ行くと JR 廿日市駅になる。

「塩之座町」は現在の住居表示で言えば、廿日市二丁目である。つまり、江戸時代から現在に至るまで、廿日市の町の中心となる部分は、かつては「塩之座町」と呼ばれていた。「座」というのは同業者組合のことで、塩を商う商人たちがこの辺りに店を構えていたということである。

資料の【17】を見てほしい。『廻廊一間旦那』の棟札の中に「塩屋与三左衛門尉」の名前が見える。永禄4年（1561）毛利氏が大鳥居を再建したとき、銭1貫文を寄付した者として「廿日市塩の座 新左衛門」の名前も出てくる。「塩之座町」の左、絵図が途中で切れているが、「東」という字と材木の「材」という字が見える。「東材木町」という町がここにあった。つまり、廿日市という町は、塩・魚などの海の産物と、材木・薪・紙などの山の産物が、すべて集まってくる町だということがこの絵図からもよくわかる。

海で生きる人たちにとって巖島神社がどういう存在であったのかを考えると、海上安全の神様である巖島神社はとても大切な神社で、古くから信仰の対象とされてきたと思う。また島内には胡子（恵比須）神社もある。「安芸の宮島廻れば七里、浦は七浦七恵比須寿」と唄われるように、胡子（恵比須）は大漁の神様でもある。そういう意味で、湯蓋道空が巖島大明神の恩寵を得て富を手に入れたという話は、広島湾沿岸地域の漁民など海に生きる人たちの巖島神社に対する信仰の中から生まれた伝説であることは間違いないだろうと思う。

一方、あまんじゃく伝説は、元々は湯蓋道空とは無関係に語り伝えられた伝説であったものが、道空の息子の道裕があまんじゃくであるというストーリーを作り上げることによって、より具体性をもたらしという効果を狙って、あまんじゃくに固有名詞が付いて、道裕という名前が当てはめられたのだろう。

このように、道空・長者伝説と道裕・あまんじゃく伝説を合体させたのは、いつ頃なのか。これまで調べたところ、江戸時代の終わり近くに至っても、まだそういう話はできていないようである。まだ二つの伝説は結びついていないということになる。とすると、明治時代以降にこの二つの伝説が合体して、現在、私たちがあまんじゃく伝説と呼んでいるストーリーができ上がったのではないだろうか。

これまで調べたところでは最も古い文献は、明治43年（1910）9月に五海市村が編述した「五海市村治績調」である。『五日市町誌』上巻192頁に引用されている。当時の五日市村は「五海市村」という表記だった。そこには、現在のあまんじゃく伝説と同じ内容が紹介されている。ということは、明治時代になってから、現在のあまんじゃく伝説の形が生まれたのであろう。

申し訳ないが、今日のご質問をお受けする時間がない。私の話は以上で終わらせていただく。ご清聴ありがとうございました。